

実践報告

「ヨーロッパ諸言語概説」を振り返る
Reflections on 30 More Years of Teaching
“Outline of European Languages”

遠藤史・兵頭俊樹・千田まや

Fubito ENDO

(和歌山大学経済学部)

Toshiki HYODO

(和歌山大学クロスカル教育機構教養・協働教育部門)

Maya CHIDA

(和歌山大学クロスカル教育機構教養・協働教育部門)

キーワード/**Keywords**: 多言語教育、教養教育

multilingual education, liberal arts education

Abstract

Looking back on the years during which the course “Outline of European Languages” has been taught at Wakayama University, the authors can point out that its basic concept of taking a bird's-eye view of European languages is suitable not only as a subject in a specialized course but also as a liberal arts subject. European languages coexist in society, have various historical and cultural relationships with one another, and have survived and developed over a long course of history. Considering these situations, it is beyond doubt that the subject, which also has a feature of bridging European languages through looking at a couple of specific languages, such as German, French, Italian, and Latin, in some detail, has had considerable value for the education conducted in the university. Fortunately, there have always been several staff members at the university who are majored or interested in European languages. They have supported this subject and cooperated for more than thirty years to inherit the teaching baton in charge.

1. はじめに (遠藤史・千田まや)

現在の教養科目「ヨーロッパ諸言語概説」の始まりは、1989年(平成元年)4月、教育学部に文化社会課程が設置された時点に遡る。「ヨーロッパの言語」は、この課程の中の国際文

化コースを構成する専門科目の一つとして置かれた。以来、国際文化コース廃止（平成15年3月）までは専門科目として、その後は全学の学生対象の教養科目として「ヨーロッパの諸言語」、そして2020年から現在の「ヨーロッパ諸言語概説」とタイトルを多少変えつつ、すでに30年余りの歴史を刻んできた。

教育学部文化社会課程国際文化コースでこの授業を立ち上げたのは、現理事の永井邦彦教授（独文学）と武田勝昭名誉教授（英語学）であるが、この報告の著者の一人である経済学部所属の遠藤史（言語学）も最初からここに加わり、授業を支えてきた。コース廃止にともなう永井氏の離脱と武田氏の定年退官の後、小栗栖等現名古屋大学教授（仏文学）、兵頭俊樹准教授（西洋古典文学・独文学）、高橋健一現成城大学教授（イタリア美術）、千田まや（独文学）が担当メンバーに加わった。2017年に小栗栖氏、2020年に高橋氏が転出すると、兵頭氏がラテン語と仏語と英語の比較を行う形でロマンス語の穴を埋めた。しかしついに兵頭氏も退職の年を迎え、2022年度は休講が決まる。全学部生を対象とする教養科目となってからは常時上限の80名近くがこの授業を受講し、人気は高い。スタッフの補充さえできれば再び開講したいところだが、現在その見通しは立っていない。

この授業の基本構成は30年近くかわっていない。遠藤が最初に概論を担当し、続いて他の担当者がそれぞれ2回もしくは3回の担当回で、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ラテン語等の特徴を紹介する。最終回で各担当者が学生からの質問に答え、筆記試験で単位認定する。担当回に何をするかは各人の裁量に任される。ドイツ語の回では自己紹介や簡単な会話の練習、音楽鑑賞、フランス語の回では中世叙事詩の紹介、イタリア語の回ではダンテやボッカチオの紹介と会話練習が行われた。後で紹介するが、聖書の一節を英語とフランス語とラテン語で読む兵頭氏の授業も極めてユニークである。

最初に概論で大枠を示し、各担当者による個性的で多彩な授業をはさんだ後、最終回に全員でまとめを行うという授業構成は、学生に好評であった。この構成のおかげで、担当メンバーが入れ替わっても授業全体のまとまりが保たれた。これもこの授業が30年以上続いた要因であろう。以下、各担当者が授業の内容を具体的に紹介する。

2. 「ヨーロッパの諸言語の概観」（担当：遠藤史）

この科目の中で私が担当したのは、1回目から3回目（クォーター科目になってからは2回目）までの授業にあたる「ヨーロッパの諸言語の概観」の部分であり、なるべく一般言語学的な視点に立って、ヨーロッパの諸言語を俯瞰的に眺めるように努めてきた。私の担当部分「ヨーロッパの諸言語の概観」が含むのは、以下に述べる4つの節である。

まず第1節では、ヨーロッパという地域を地理的に概観することから始める。ここが同時に授業全体の始まりとなるため、まずは受講者にヨーロッパという地域について具体的なイメージを描いてもらうためである。次に、ヨーロッパにおける言語分布の概略を地図上で見渡す。ここで重要なポイントは、(1)ヨーロッパには多数の言語が話される上、一国の中に複数の言語が話されるケースが少なくないこと、そして、(2)国境と言語の境が必ずしも一致しないこと、の2つである。「ヨーロッパは多言語世界である」という事実は、この時点で受講

生に新鮮な驚きを与えるようだ。

続いて言語学的话题に入り、第2節では言語系統からヨーロッパの諸言語を概観する。最初に「言語系統」という用語の概略を説明し、ヨーロッパの諸言語の大多数が属するインド・ヨーロッパ語族（印欧語族）の系統樹を示す。これを詳細に観察することで、この語族の内部が十余りの語派に分かれていること、また、この語族に属する諸言語がヨーロッパ以外の地域（たとえばインドやイラン）にも話されていることなどが確認できる。ここまで進むと、英語、ドイツ語、フランス語等々がどの語派に属するかが言えるようになる。スラヴ語派やケルト語派など、続く各論で扱われない諸語については、私自身の経験-たとえばロシア滞在やウェールズ旅行など-も交え、多少雑談的であっても紹介するようにしている。なお、ヨーロッパにおける非印欧語の存在も重要なので、フィンランド語・ハンガリー語などのウラル語族、系統的に孤立したバスク語などについても言及している。ヨーロッパの諸言語が想像以上に多彩であることを受講者に認識してもらいたいからである。

第3節は文法的特徴という視点からヨーロッパの諸言語を概観するセクションで、私の担当部分の中心を成している。この節で扱う文法的特徴は、語順、格と文法関係、そして単語の内部構造の3つである。これらは、近年の言語類型論で重視されている現象、そして日本語との対照においても興味深い現象を中心に選んだ。以下、それらの概略を紹介する。

まず語順のセクションでは、語順の類型論におけるパラメータ-VO言語とOV言語-を中心に、英語と日本語の語順の対照から、ヨーロッパの諸言語の一般的な語順に気づかせる。さらに英語とフランス語の対照（形容詞と名詞の順序）、ドイツ語（とゲルマン諸語）の定動詞第2位の原則（あるいは定形第二位の法則）および枠構造、フランス語の接語代名詞などを紹介し、ヨーロッパの諸言語の間においても語順のバリエーションが見られることを指摘する。語順の類型論は近年理論化が進展している分野であるが、過度の一般化に陥らないように注意しつつ、事例に即して受講生に考えさせるように気を配ってきた。

格のセクションでは、日本語の例も参照しつつ、まず格という文法現象の概念、次に文法関係と格の関係から出発する。そして、ドイツ語やロシア語の名詞の格変化を観察することによって、ヨーロッパの諸言語の間でも、格の数にかなりの違いがあることを指摘する。なお、受講生によっては、格が存在しない方が言語として便利であるという思い込みが見られることもある（外国語として英語しか知らないことの弊害であろう）。そのため、英語とロシア語の対照によって、豊かな格組織を持つ言語では語順の自由度が高いことなどを示し、格という文法現象の意義に気づかせ、抵抗感を軽減するように努力している。

最後のセクションでは、単語の内部構造に注目し、ヨーロッパの諸言語の単語が内部にどの程度の文法的情報を含みうるか（統合度のパラメータ）という話題を扱う。動詞の内部構造を具体的な例として取り上げて、英語・ドイツ語・フランス語・ラテン語・ロシア語の5つの言語を対照し、人称という文法的情報が動詞の内部にどの程度含まれるか観察し、総合的言語と分析的言語という類型論的パラメータを導入する。さらに進んで、ラテン語・フランス語・プロヴァンス語・スペイン語という同語派の新旧4言語を対照し、このパラメータの通時的な変化や、地理的な変異に注意を促す。

最後の第4節では、ヨーロッパの諸言語をとりまく社会的状況を扱う。多言語世界ヨーロ

ッパというイメージは最初の節で導入しているが、この第4節では社会言語学的な視点から、さらにこのトピックを掘り下げる。まず、ヨーロッパの諸言語の話者数にはそもそも大きな不均衡があり、話者数が数千万人に達する言語がある（ロシア語・ドイツ語・英語・イタリア語・フランス語等）一方、話者数が非常に少ない言語や、母語話者がすでに存在しない言語もある事実を紹介し、このような不均衡が言語の社会的地位（公用語であるか否か）に影響を与えうることを指摘する。さらに、公用語としてどの言語を認めるかという政策（言語政策）に関しても、国によって違いが見られることを指摘する。ただし政策という観点から見ると、EUという新たな枠組みの中で、ヨーロッパの諸言語をめぐる言語政策は今後大きく変化する可能性もある。そのため、ここでは社会言語学的な事実の指摘に止め、極端な政治的姿勢に偏らないように注意してきた。

3. ドイツ語（担当：千田まや）

この授業が開設された1989年当時、初修外国語（本学ではドイツ語、フランス語、中国語、ハンゲル）は英語と並ぶ必修科目であったが、2022年現在、本学の学生の大半は、英語以外の言語に触れることなく卒業する。英語と同じ西ゲルマン語に属し、古英語と共通の特徴を保持しているドイツ語は、初修外国語を選択していない学生にもなじみやすい。そのため概論の次にドイツ語を配置した。

3-1. 挨拶、数字、自己紹介

まず最初にドイツ語圏に行けば必ず使うあいさつ、Guten Morgen! 「おはよう」 Guten Tag! 「こんにちは」 Guten Abend! 「こんばんは」 Gute Nacht! 「おやすみ」と Danke! 「ありがとう」 Bitte! 「どうぞ」「どういたしまして」を覚えてもらう。これらはいずれも綴りも音も英語に似ているため覚えやすい。

次に1から10までの数の綴りを板書して「ほとんどはローマ字読みだが例外もある」と解説しながら発音する。1から10までの数字の読みの中には、覚えにくい複母音 ei (eins, zwei, dreiに含まれる「アイ」)、ie (siebenに含まれる「イー」)、eu (neunに含まれる「オイ」)と、英語とは異なる子音の読み、v (vierに含まれる「フ」)、ch (achtに含まれる喉から強く出す「ハ」)、s (sechs, siebenに含まれる「ズ」)、z (zehnに含まれる「ツ」)の音がある。つづりを意識させながら声に出して読ませると、受講生は例外的な読み方を無理なく覚える。応用練習として、別れの挨拶 Auf Wiedersehen! 「さようなら」、Deutsch, 「ドイツ語」 Deutschland 「ドイツ」をつづりを頼りに発音させる。さらに自己紹介文「私の名前は(...)です」 Ich heiÙe / Mein Name istや「私は大学生です」 Ich bin Student/ Studentin. を暗記させて、受講生同士がドイツ語で挨拶と自己紹介を交わしたところで前半終了である。

3-2. 名詞の性と格、冠詞類の格変化、動詞の人称変化

授業の後半では、ドイツ語の特徴を理解してもらう。概論で学習済みであるが、ドイツ語の名詞に性と格があること、名詞につく定冠詞や不定冠詞が、名詞の性・数・格にあわせて

格変化することを表を見せながら説明すると、受講生はやはり戸惑う。授業後のコメントシートにも「最初、発音は簡単だと思ったが、あとから変化表がたくさん出てきたから、ドイツ語はやっぱり難しそう」と書かれるのが常である。定冠詞・不定冠詞の格変化表や、動詞の現在人称変化表は、語学の授業では必ず暗記しなければならないが、たった二回しかないこの授業では暗記までは無理で、表を見せることしか出来ない。そのかわり、ドイツ語の語学の授業では使わない古英語とドイツ語の名詞の格変化表を見せて、古い英語に名詞の性や格変化があったことを確認させ、英語とドイツ語の歴史的なつながりを意識させる。格変化を捨てた英語では、語順によって主語や目的語を見分けるが、格を保持しているドイツ語では、主語と目的語の位置を入れ替えることも出来るという具合に、文の構造にそれぞれ特徴があることを受講生に理解させたら、授業一回目は終了である。

3-3. 子音推移

第二回の授業では、まず、ゴート語、古英語、古ザクセン語の数字の読み方を紹介する。いずれも今の英語に近いので受講生もなじみやすい。次に、古高ドイツ語、今のドイツ語の数字の表を並べて、古ザクセンと古高ドイツ語の間で子音に変化（子音推移:p→f, pf, t→z, k→ch, th→d, v→b, d→t など）がみられることを確認する。

	ゴート語	古英語	古ザクセン語	古高ドイツ語	今のドイツ語
2	twai	tween	twens	zwei	zwei
3	threis	thri	thrie	dri	drei

「英語が変化してドイツ語になったわけでも、ドイツ語が変化して英語になったわけでもない」と一応念を押したうえで、「子音推移」しなかった英語と「子音推移」を経たドイツ語の現在の姿を比較し、ドイツ語から英語を類推するクイズを出すと、学生は興味をそそられるようである。その際、ヒントとしてオランダ語も併記する。

ドイツ語	Apfel	オランダ語	appel	古英語	æppel	英語	apple
ドイツ語	Milch	オランダ語	melk	古英語	meolc	英語	(?)
ドイツ語	danken	オランダ語	danken	古英語	thancan	英語	(?)
ドイツ語	trinken	オランダ語	drinken	古英語	drincan	英語	(?)

(答は、milk, thank, drink)

このように英語をゲルマン語の中に位置づけ、他のゲルマン語にはない英語の特徴を意識させることは、英語のより深い理解につながる。英語の歴史に興味を示した学生には、教養科目「英語の歴史」(担当：遠藤史)の受講を勧めた。

時間に余裕があれば、多言語で提供されているディズニーのヒット曲を、英語、オランダ語、ドイツ語で聴き比べたり、同じメロディに英語とドイツ語の歌詞をつけているドイツ人歌手の曲を聴かせたりした。「ドイツ語は綴りをみれば発音できるから、みんなも歌詞を見な

から歌えるよ」と言うと、歌詞のプリントをみながら熱心に聴いてくれた。

3-4. 文の構造（定形第二位の法則、疑問文の構造、枠構造）と会話への応用

授業二回目後半は、ドイツ語の文の構造をふまえた会話練習にあてる。ドイツ語の疑問文は、(疑問詞)+動詞の定形+主語ではじまるので、「Sie (あなた)」に対する疑問文と、「ich (私は)」ではじまる平叙文を組み合わせれば簡単な会話文を作ることが出来る。

- Woher kommen Sie? — Ich komme aus Japan (China/Korea usw.)
- Sind Sie Student/Studentin? — Ja, ich bin Student/Studentin.
- Was studieren Sie? — Ich studiere
- あなたの出身はどこですか? — 私は日本 (中国/韓国など) 出身です。
- あなたは(男子)大学生/女子学生ですか? — はい、私は大学生です。
- あなたの専攻は何ですか? — 私の専攻は (...) です。

上記の会話文は自己紹介として使えるので暗記してもらおう。慣れてきたところで、話法の助動詞と本動詞の枠構造を説明する。

- Können Sie Englisch sprechen? — Ja, ich kann Englisch sprechen.
- Was möchten Sie trinken? — Ich möchte ein Bier trinken.
- 英語が話せますか? — はい、話せます。
- 何が飲みたいですか? — ビールを一杯飲みたいです。

単語リストと助動詞・動詞の人称変化表を板書して似たような会話表現を作らせたり、コメントシートに感想を書かせたりしているうちに終了時間となるので、最後に Auf Wiedersehen! Tschüss!と挨拶して終わる。たった二回の授業だが、コメントシートからは、英語以外の言語を使って挨拶を交わし、自己紹介をした楽しさや満足感が伝わってきた。

4. 英語・フランス語・ラテン語 (担当: 兵頭俊樹)

印欧語族のイタリック語派のなかのラテン語からさらに派生したロマンス諸語とも呼ばれるフランス語やイタリア語など南欧の言語は親子関係を比べてみるのが面白い。

ラテン語の名詞には性数格がある。男・女・中の性別が人や動物のほかあらゆる名詞にある。数は単数か複数かで、これは英語でなじみがあるが、複数形の作り方は英語に比べると多様。格は英語では代名詞に僅かに残るにすぎないが、ラテン語は名詞・代名詞に主・属・与・対・奪・(呼)格がある。性数格に応じて名詞の語尾が多様に変化することを変化表で説明すると、たいていの学生はうんざりした顔をする。そこで名詞の性はなかには語尾で見当がつくものがあるからと少し安心させる。複数の変化ははじめはできるだけ端折った方が抵抗感が少ないだろうと考える。格については幸い日本語の格助詞を引き合いに出せば親近感を覚えるが、くっつけるだけの助詞とは違って、ラテン語のほうは複雑屈折をしてやはり面

倒だとなる。

講義で使う例文は馴染みやすさを考えて旧約聖書の創世記のノアの方舟からとって見た。興味を抱かせるためにフランス語テキストを並べて、似ている単語が多いがどれだろうと探させてみる。フランス語を第2外国語としてとっている学生はここで関心を示すはずだが。最近では独仏よりも中韓を選ぶ学生が多く、第2外国語を必修としないコースもある。英語はどうか。英語の語彙は、語派は違うが歴史的な経緯もあって、半数以上がたどっていけばラテン語に遡るといえる。使用するラテン語テキストの語源を調べて、何らかの形で共通する英単語を併記すれば、語彙の習得という点ではメリットが大きいはずだ。英語の勉強にもなる。

テキストは、洪水が治まったかどうかを見ようとしてノアが鳩を放ち、鳩がオリーブの葉をくわえて戻って来る場面である。格調高いとされる文語訳を出してみる

尚又七日待て再び鳩を方舟より放出ちけるが鳩暮におよびて彼に還れり。視よ其口に橄欖の新葉ありき。是に於てノア地より水の減少しをしれり。

(文語訳聖書「創世記」8章10-11章)¹

学生の反応は芳しくない。古文は苦手が多い。高校生の頃はそうだった。そこで少し調べてみる。英訳の一つにリビングバイブルというのがあり、これはわかりやすさをモットーにした訳だそう。そしてこれを日本語にした邦訳リビングバイブルも学生には受けがよかった。

Seven days later Noah released the dove again, and this time, toward evening, the bird returned to him with an olive leaf in her beak. So Noah knew that the water was almost gone.

それから七日後、ノアはまた鳩を飛ばしてみました。夕方ごろ戻った鳩を見ると、オリーブの若葉をくわえています。それで、水がかなり引いたことがわかりました。

(リビングバイブルとリビングバイブル日本語版「創世記」8章10-11章)²

夕方は日が暮れかかるころという意味なので、夕方ごろのころはいらない気もするが、聖書の邦訳のなかではとにかくわかりやすい。聖書の言葉をこんなに身近な言葉で訳すとありがたみが…。

日本語で場面を理解してから挑戦してみよう。上がラテン語、下がフランス語のテキスト。太字は語源的に羅仏で対応する単語。下線は述語動詞、点線は現在分詞や過去分詞。フランス語では平叙文で英語と同様に述語動詞の前に主語となる名詞か代名詞がくるが、ラテン語では、述語動詞の語尾で主語の数・人称が示されるので、必ずしもそうではないことは覚えておこう。diebus aliis は autres jours と名詞・形容詞の順が逆。

Expectatis autem ultra **septem diebus aliis**, rursum dimisit columbam ex arca.

At illa venit ad eum ad vesperam, **portans ramum olivae virentibus foliis** in ore suo. Intellexit ergo **Noe quod cessassent aquae super terram.** (ウルガータ聖書「創世記」8章10-11章)³

Il attendit encore **sept autres jours**, et il envoya de nouveau la **colombe** hors de l'**arche**.

Elle revint à lui sur le soir, **portant** dans son bec un **rameau d'olivier**, dont les **feuilles étaient** toutes **vertes**. **Noé reconnut** donc que les **eaux s'étaient retirées** de dessus la **terre**.

(ウルガータ聖書から Louis-Claude Fillion 1843-1927 が仏訳) 4

ノルマン・コンクエストでフランス語の語彙が大量に英語に入ったとはいえ、フランス語を第2外国語を選択していても、これだけではやはりまだ大変。このフランス語のテキストには、アンコール、ボン・ジュール、ボージョレ・ヌボー、ソワレ、オーデコロンなど外来語として日本語に入っている単語が含まれている。たまたまかもしれないが香しいイメージの語彙が多い感じがする。ここでクイズ。もともとなっている単語はどれでしょう。綴りと発音については先にやっておくべきか。

名前に聞きおぼえがあれば親しみもわくように、できる限り英単語に結び付けて語彙を理解し増やしていくにこしたことはない。ここで3言語の語彙の対応表を参考にする。ラテン語と英語は辞書の見出し語形を、フランス語はテキストに出ている形のまま挙げる。品詞が違う場合などもある程度あり、語源が同じでも意味が違ってくこともある。また接頭辞や接尾辞がついて単語の対応が部分的な場合もある。

ラテン語単語	意味 etc.	関連する英単語	フランス語
exspecto (expecto)	待つ [第1 変化動詞]	expect	
autem	しかし、さらにまた[接続詞]		
ultra	さらに [副詞]、を越えた [前置詞]	ultra	
septem	七 [数詞]	seven	sept
dies	日 [第5 変化男性名詞]	day	jours
alius	他の [形容詞]	else	autres
rursum	もとへ、再び [副詞]	versus	
dimitto	送り出す [第3 変化動詞]		
mitto	送る	mission	
columba	鳩 [第1 変化女性名詞]		colombe
ex	から外へ [前置詞]	ex-	
arca	箱舟 [第1 変化女性名詞]	ark	arche
at	しかし [接続詞]		
ille	あれ [指示代名詞]		elle
venio	来る [第4 変化動詞]	convenient	revint
ad	へ [前置詞]	add	à
vespera	夕方 [第1 変化女性名詞]	vesper	
porto	運ぶ [第1 変化動詞]	portable	portant
ramus	枝 [第2 変化男性名詞]	ramus	rameau
oliva	オリーブ [第1 変化女性名詞]	olive	olivier
vireo	緑色である [第2 変化動詞]	vireo	vertes
folium	葉 [第2 変化中性名詞]	folium	feuilles
os	口 [第3 変化中性名詞 gen. -oris]	os	

suus	自分の		son
intellego	理解する [第3 変化動詞]	intelligent	
ergo	それゆえ [接続詞]	ergo	
quod	ということ [接続詞]	that	que
cedo	行く、消え去る [第3 変化動詞]	succeed	
aqua	水 [第1 変化女性名詞]	Aquarius	eaux
super	上に [前置詞]	super	
terra	大地 [第1 変化女性名詞]	terra	terre

羅 *quod* は仏 *que* で、意味の上からは従属接続詞の英 *that* だが語源的には *what* と関連する。これはカタカナで書いてみると結構似ているし、実際発音してみると口の形や下の位置が似ているのを実感できる。クワッドとフワット。また *that* は接続詞として働くほかに指示代名詞（形容詞）にもなるが、これはドイツ語の接続詞 *dass* や定冠詞・指示代名詞の *das* と関連がある。

フランス語に入ると中性名詞はなくなって少し楽。数も英語同様複数は-s 語尾が多く、格の区別もなくなってぐっと英語に近くなるから親近感も芽生えてくる。ところが3人称の人称代名詞の直接目的格が定冠詞と形が同じなので混同しそうになる。この時少し説明があれば少しほっとする。ラテン語で遠いものを指す指示代名詞（形容詞）*ille*「あれ、あの、かの」

（3人称男性単数主格形）が真っ二つに裂かれて、前半の *il* はフランス語の代名詞「彼は」（3人称男性単数主格形）になり、後半の *le* はフランス語の定冠詞「その」（男性単数形につく）になったと言うと、よく聞いている学生は、ふーん、ふむふむといった感じで少し安心顔に。もう一つ混乱を招きやすいのは、フランス語はふつう人稱代名詞の目的格が英語と違って動詞の前に来ること。中高6年間英語を習ってきたあとで切り替えがなかなか難しい。

単語に馴染みができればこのくらいだけ押さえておいて、あとは第1変化名詞あたりから少しずつ変化表を小出しにしていく。一度に変化表を出されるとたいい嫌になる。ラテン語の名詞はその語尾変化のパターンから5つにグループ分けされる。そのうちの第1変化名詞と呼ばれるものは、多くは女性名詞で、主格の語尾が-aで、これが属格で-aeとなり、対格で-am、奪格で-a（長母音）となる。与格も含めここで格の説明が必要だが、本稿では省略。再びクイズ。テキスト中に第1変化名詞の属格が1個、対格が3個、奪格が1個あります。それはどれでしょう。——学生が質問する。属格は2個ではないですか。——説明してなかったですが、形が同じになってしまうけれども複数主格も-aeです。——どうやって区別しますか。——文脈や構文から。——オリーブの葉のオリーブ *olivae* は属格でわかりますが、水 *aquae* がどうして複数形になるのですか。数えられない名詞のはずです。——辞書を引くと泉の意味では複数になると書いてある。ノアが体験した大洪水は泉の比ではなかったらうからきっと複数なのだろう。少ししどろもどろになりながら後でもっと大きい辞書を引いてみると、ウルガータのラテン語訳聖書では原典のヘブライ語聖書に倣って水は複数形が普通らしい。この3行ばかりのテキストで名詞は第1変化が多数を占めるのでこれで置き、動詞はとりあえず日本語を当てておいて時制などの説明は後回しにする。そこで前置詞と人稱代名

詞を説明すれば、おおよその内容はつかめるはず。文頭の絶対的奪格は英語の分詞構文でなんとなく理解する程度にとどめる。

ラテン語には定冠詞も不定冠詞もない。それに比べるとフランス語は、これがあるために次に名詞がくることが予告されるので安心感のようなものがあるが、しかし作文になると定冠詞か不定冠詞か——その他の限定詞も含め——選択に迷うことになるだろう。ラテン語はその点迷わなくて済む。しかし冠詞がないということは名詞の存在が予告されないことになる。習得語彙が少ない段階では名詞がくるのか何がくるのか見当がつきにくいことになる。言語というのは一長一短でなかなかうまくいかない。

5. 受講生の反応 (千田まや)

授業最終回の質疑応答の場では、受講生から様々な質問が出た。2019年度のをいくつか紹介する。

- ・ドイツ語には分離動詞があるが、古英語にも分離動詞はあるのか？
- ・アジア、アフリカ、アメリカ、ヨーロッパでは、どこが一番言語数が多いのか？
- ・なぜ名詞に性があるのか？
- ・移民が増えると、新しい言葉が生まれることはあるのか？
- ・中国の勢いが強いが、今後世界の言語バランスが変わることはあるのか？

語学の授業では出ない質問もあり、担当者としても意表を突かれる思いだったが、経験と知識の及ぶ範囲で答えた。さらに、海外渡航経験の豊富な遠藤氏と高橋氏が自身の経験談を語り、母語以外の言語を使う難しさと楽しさを受講生に伝えた。

受講生の反応はどうだったのか。概論を遠藤氏、フランス語を小栗栖氏、イタリア語を高橋氏、ラテン語を兵頭氏が担当し、千田がドイツ語のほかに EU の公用語についての授業をした 2014 年度の感想の記録が手元に残っているので、手短かに紹介したい。

肯定的なものとしては、

- ・ヨーロッパに興味を持った。毎回新しい知識を得られて楽しかった。
- ・英語以外の言語とその起源を知ることができて興味深かった。
- ・分析的言語と総合的言語の違いが興味深かった。
- ・公用語の話が興味深かった。
- ・知らない言語をていねいに教えてもらえて、ためになった。

批判的なものとしては、

- ・言語の比較や文法の変遷を知りたかった。
- ・資料が多く、情報に飲まれた。

6. おわりに (遠藤史)

この科目が歩んできた道を振りかえってみると、ヨーロッパの諸言語を俯瞰するという基本的な趣旨は、専門科目としてはもちろん、教養科目としても適していたことに今更ながら

気づく。ヨーロッパの諸言語は社会の中で共存し、歴史的にも文化的にも様々な関係を取り結び、切磋琢磨しつつ発展してきた。このことを考えるなら、各言語を「語学」として学ぶことを超えて、お互いを橋渡しするという趣旨に立つ本科目は少なからぬ存在価値を有してきたと言える。幸いなことに本学には、ヨーロッパの様々な言語を専攻したり、研究上興味を持ったりしていた教員が何人か在籍していた。そのような教員たちが本科目を支え、協力して担当のバトンを受け継いできたのは幸運なことであった。

¹ 『旧新約聖書 引照付』日本聖書協会 1982, p.11.

² <https://www.biblegateway.com/passage/?search=Genesis+8&version=TLB>(参照 2022-02-26)

『リビングバイブル〈旧新約〉』いのちのことば社 2016.

³ Biblia Sacra iuxta vulgatam versionem, Deutsche Bibelgesellschaft, 2007, p.13

⁴ <https://magnificat.ca/textes/bible/genese.htm> (参照 2022-02-26)